

体操競技のジュニア育成に関する研究—第1報—

九州各県のジュニア体操クラブを対象にして

錦井利臣・木村正治・坂下玲子

A study of the Gymnastic Athlet Development System in Kyushu —First Report—

Toshiomi NISHIKI, Masaharu KIMURA and Reiko SAKASHITA

(Received May 21, 1990)

A survey was conducted with members, parents and instructors of a junior gymnastics club in Kyushu. The survey consisted of a questionnaire about such topics as the participants' motives for joining the club and their desire to continue participation. The aim of the survey was to clarify the problems of junior gymnastics clubs.

The results were as follows.

1. The membership in junior gymnastics clubs in Kyushu is low.
2. Many of the members join these clubs from a personal interest, but some join because of parental influence.
3. Eighty percent of those who ranked high in the kyushu meet for junior gymnastics had a strong interest in continuing participation in such a club through their high school years; 33.6% did not show this interest.
4. Percentages of parents who think that club membership is something interesting for their children during their school days and then on into the future were 35.9% and 39.2% respectively.

In the future, we want to investigate the details of training gymnasts and instructors' ideas for conducting gymnastics clubs.

Key words : junior gymnastic club, motivation, participation, kyushu.

I 緒 言

今日, 体操界は, 高度の技術開発(技の難度化)の影響をうけ, 体操競技開始年齢の低年齢化が進んでおり, 選手層も, 特に女子に著しい低年齢化がみられる。

過去, 男子選手の円熟期は, 27~28歳といわれた時期もあったのであるが, 先のソウルオリンピック日本チームの平均年齢は, 男子21.0歳, 女子17.4歳であり^{1,2)}, 隔世の観がある。

一方, このナショナルチームのメンバーの殆どが, 特に女子において, 過去に私的・民間の体操クラブで動機づけされ, 成長していることが明らかにされたことは, 体操競技選手の育成には, ジュニア期から一貫した育成・強化のシステムの必要性をものがたっている。

大都市圏では, 私的および民間企業体などの主催する, ジュニア体操競技選手育成のシステムが, 多数存在するが, 九州管内においては, 決して恵まれている状況におかれているとはいえない。

1984年から, 九州体操協会は, ジュニア選手の育成の普及や技術向上を目指して, 「九州小学生体

操大会」を開催するようになった。

年毎にこの大会の技術は向上しているものの、学校クラブの出場者は皆無であり、社会体育に属するジュニア体操クラブの格差も技術面を中心に著しく大きいことが指摘される³⁾。

ジュニア体操クラブの責務としては、人材を発掘し、その個性に応じたトレーニングによって優秀な競技者を育てることにあると考えられるが、責務を果たすために各クラブ内の抱えている問題点は、共通のものや各クラブ特有なものなど様々なものが考えられる。

例えば、熊本県では、昭和46年より、熊本県体操協会の主催によって、子供体操教室が開催されていたが、永続的な練習場の確保の問題や、指導者の欠落などの困難な問題が発生し、昭和62年より、民間体操クラブに引き渡す経過をたどっているという事実がある。

このように、継続的にジュニア体操クラブを主催していくことそのものにも問題が山積みしていることが指摘される。

そこで今回、九州圏内のジュニア体操クラブの実態や、具体的な問題点を把握し、今後の育成に向けての検討課題を明らかにしたいと考え、アンケート調査を試みた。

この問題を分析し課題を解決することによって、九州全体のジュニア選手育成の発展と、技術向上の足がかりをつくりたいと願ったからである。

第一報では、主にクラブ員、保護者の態度や意識の面から検討を加え報告する。

Ⅱ 対象および方法

第4回九州小学生体操大会（大分市，1989）（以下，九州大会と省略）に参加したジュニア体操クラブを中心に，九州各県の15団体（沖縄2，鹿児島1，宮崎1，大分2，熊本4，長崎1，佐賀2，福岡2）に所属するクラブ員162名（男子64名，女子98名）とその保護者およびクラブ代表者を対象に，質問紙法によるアンケート調査を実施した。

実施期間は，1989年11月から，1990年3月までである。なお，今回は小学1年生から6年生までを調査の対象とした。

調査内容は，各クラブ員に対して，体操を始めた動機，練習や試合についての実態および意識や態度等である。保護者に対しては，練習への参加状況，子どもの生活面や性格の変化，練習や試合に対する意識や態度等である。さらに，各クラブ代表者に，活動状況とそれに関わる問題点の調査を行った。

アンケート分析に際し，体操を始めてからの経験年数を0～2年未満，2～4年未満，4年以上の三段階に分けた。技術レベルの目安として，九州大会に出場し，その成績が個人総合において1位から25位までの者を：A₁，上位から25位以外の者：A₂，さらに九州大会に出場出来なかった者を：Bとして三段階に分けた。

Ⅲ 結 果

今回，調査の対象となった体操クラブ員162名のうち，九州大会への出場者は48名であった。さらに個人総合において上位25位までの成績を納めた者：A₁は，25名（男子13名，女子12名）。個人総合25位以外であった者：A₂は，23名（男子9名，女子14名）であった。大会非出場者は114名

(男子42名, 女子72名)であった。

表1は, 大会出場の有無別にみた学年の分布である。全体では, 1年生が7名と少なく, 4年生が多いものの, 他学年はほぼ同じ割合となっている。大会出場有無別では, 5・6年生の高学年程, 出場者が多く, 大会上位以内: A₁の成績を納めた92%がこの5・6年生であった。非出場者には2年生から4年生が多く, 大会出場と学年分布については, 有意差が見られた (χ^2 test, P<0.001)。

表1. 大会出場有無別にみた学年分布

出場有無 \ 学年	学年						計
	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生	
A ₁ +A ₂	0	1	3	9	16	19	48
B	7	28	24	33	15	7	114
計	7	29	27	42	31	26	162

A₁+A₂: 大会出場者 B: 非出場者 χ^2 test, P<0.001

表2は, 大会出場の有無別に経験年数をみたものである。平均経験年数は2.6年で, 経験年数の長い者に出場者が多い。 (χ^2 test, P=0.05)。このことは経験年数が長ければ, 技術の習熟度が高くなることによるものと思われる。経験年数には著しい幅があり, 入部1ヶ月未満の者から, 9年間継続しているものもみられた。

表2. 大会出場有無別にみた経験年数

出場有無 \ 経験年数	経験年数		
	0~2年	2~4年	4年以上
A ₁ +A ₂	9 (19.6)	20 (43.5)	17 (37.0)
B	43 (39.8)	40 (37.0)	25 (23.1)
計	52	60	42

A₁+A₂: 大会出場者 B: 非出場者 χ^2 test, P<0.05
(n=154)

表3は, 男女別にみた体操クラブの入部の動機である(複数回答)。「鉄棒, マット, とび箱が得意」, 「オリンピック選手になりたいから」など積極的動機がそれぞれ26.1%, 25.5%と高い比率を示した。しかし, 「友達や兄弟がやっているから」, 「人から体操にむいている体つきといわれたから」など, 非積極的と考えられる動機の者も28.0%, 8.7%にみられた。さらに「家では思いきり遊べない」, 「学校がなくなってしまだから」, 「なんとなく」等, 体操を行う理由がはっきりしない者も多数にみられた。その他では「運動が得意」, 「体操の先生になりたい」, 「体を鍛えたい」などの意見

がみられた。

表3. 男女別にみた体操クラブ入部の動機（複数回答）

動機 性別																	計	%
	ア	イ	ウ	エ	オ	カ	キ	ク	ケ	コ	サ	シ	ス	セ	ソ	タ		
男	18.8	17.2	3.1	51.6	20.3	9.4	4.7	26.6	9.4	1.6	7.8	—	9.4	6.3	29.7	3.1	7.8	100.0 (n=64)
女	13.4	7.2	7.2	27.8	33.0	1.0	3.1	25.8	4.1	8.2	2.1	1.2	18.6	10.3	22.7	12.4	15.5	100.0 (n=97)
全体	15.5	11.2	5.6	37.3	28.0	4.3	3.7	26.1	6.2	5.6	4.3	1.2	14.9	8.7	25.5	8.7	12.4	100.0 (n=161)

- | | |
|--------------------|------------------------------|
| ア. テレビ等を見て | コ. 試合のユニフォームが着たい |
| イ. カッコいいから | サ. 鉄棒, マット, とび箱が苦手 |
| ウ. 家ではおもいきりあそべない | シ. スマートになりたい |
| エ. 家の人にすすめられたから | ス. 体がやわらかいから |
| オ. 友達, 兄弟がやっていたから | セ. 人から体操にむいている体つき
といわれたから |
| カ. 学校が終ってひまだから | ソ. オリンピック選手になりたい |
| キ. 他にやりたいスポーツがない | タ. なんとなく |
| ク. 鉄棒, マット, とび箱が得意 | チ. その他 |
| ケ. 他人に自満したいから | |

各クラブの練習日数は週当り, 最少2日, 最多7日で, 平均4.4日であった。1日の練習時間については, 1時間~4時間であり, 平均2.3時間であった。中には, 夏期に2時間, 冬期には1時間と季節によって時間を変えて実施するクラブもあった。

表4は大会出場有無別にみた練習参加状況である。クラブ員の65%の者は, ほとんど休まず, 毎回練習に参加している。大会出場者が非出場者に比較し, わずかに高く, 練習に参加していることがうかがえる。

表4. 大会出場有無別にみた練習参加状況

参加 状況 出場有無	ほとんど 休まない	時々休む	よく休む
	A ₁ +A ₂	34 (69.4)	13 (26.5)
B	71 (64.0)	38 (34.2)	2 (1.8)
計	105 (65.6)	51 (31.9)	4 (2.5)

χ^2 test, P=0.065, n=160, 不明: 2

A₁+A₂: 大会出場者, B: 非出場者

表5は練習を休むのはどんな時ですか(複数回答)という質問に対する回答を示したものである。「病気の時に休む」が圧倒的に多く, 次に「けがの時」「きつい時」が多かった。一方, 練習がきつい時がありますかという問いに対しては, 「よくある」「時々ある」と答えた者が約60%にみられた。

表5. 練習を休むのは、どんなときですか (複数回答)

1	病気のとき	143	(88.3)
2	けがをしたとき	60	(37.0)
3	きついとき	19	(11.7)
4	練習がきついとき	6	(3.7)
5	テレビをみたいとき	3	(1.9)
6	友だちとあそびたいとき	0	(0)
7	その他	35	(21.6)

(%)

表6は練習が休みの時の自主練習の状況を経験年数別にみたものである。柔軟体操をやると答えたものは、経験年数毎に、2年未満55.8%、2~4年未満30.0%、4年以上40.5%と、全体の約40%にみられた。一方、何もしないと答えた者も2~4年未満の者を中心に全体では40%にみられた。経験年数と自主練習については有意差がみられた。

表6. 経験年数別にみた自主練習の状況

	ランニング	柔軟運動	補強運動	鉄棒	何もしない	その他
~2年未	7 (13.5)	29 (55.8)	12 (23.1)	4 (7.7)	13 (25.0)	6 (11.5)
2~4年未	4 (6.7)	18 (30.0)	6 (10.0)	7 (11.7)	32 (53.3)	2 (3.3)
4年以上	3 (7.1)	17 (40.5)	9 (21.4)	3 (7.1)	15 (35.7)	4 (9.5)
計	16 (9.9)	67 (41.4)	31 (19.1)	16 (9.9)	63 (38.9)	13 (8.0)

χ^2 test, P=0.064

表7は自分から新しい技に挑戦しますかという質問を、大会成績別にみたものである。

大会上位に位置した選手では、新技に「時々挑戦する」という者が最も多く60%にみられた。全体では「よくする」「時々する」者を挑戦する者、「あまりしない」「しない」とした者を挑戦しない者とした場合、それぞれがほぼ半数を占めた。(χ^2 test, P=0.014)

表7. 大会出場成績別にみた新技挑戦に対する態度

	よくする	時々する	あまりしない	しない	計
A ₁	3 (12.0)	15 (60.0)	7 (28.0)	—	25 (100)
A ₂	5 (21.7)	5 (21.7)	12 (52.2)	1 (4.3)	23 (100)
B	12 (10.8)	42 (39.0)	36 (34.6)	21 (18.9)	114 (100)
計	20 (12.6)	62 (39.0)	55 (34.6)	22 (13.8)	162

A₁: 大会出場者 (個人総合上位25位以内) χ^2 test, P=0.014

A₂: 大会出場者 (個人総合上位25位以外)

B: 大会非出場者

表8は、はじめて新しい技をする時の態度を経験年数別にみたものである。全体的には「先生の補助があれば、思い切ってする」とした者が圧倒的に多く、60.5%にみられた。しかし、「補助があってもなかなかできない」「先生におこられてもなかなかできない」とするものも合わせて25.3%にみられた。経験年数別からみると、4年以上経験している者に30.1%の者がなかなかできないとしており、他の者より多い数値となっている。

練習中のけがの経験については、男子が30名(46.9%)、女子41名(42.3%)の者がけがをした事があるとしており、わずかに男子の方が多い。(表不出)

表8. 経験年数別にみた新しい技をするときの態度

	イ	ロ	ハ	ニ	ホ
～2年未	9 (17.3)	31 (59.6)	7 (13.5)	13 (8.0)	0
2～4年未	7 (11.7)	40 (66.7)	10 (16.7)	5 (9.6)	1 (1.7)
4年以上	4 (9.5)	22 (52.4)	10 (16.7)	6 (14.3)	0
計	22 (13.6)	98 (60.5)	28 (17.3)	13 (8.0)	1 (0.6)

(n=146) χ^2 test, N.S

イ：思いきって一人でする
 ロ：先生の補助があれば思いきってする
 ハ：補助があってもなかなか出来ない
 ニ：先生におこられてもなかなか出来ない
 ホ：その他

表9は、けがをしている時の練習はどうしたかという問に対する回答を、大会出場有無、成績別にみたものである。けがをしている時の練習は「痛くないのだけ練習した」という者が多かった。大会出場者のうち上位25位以内の者のほとんどが、けがをしても練習をしていることがわかる。さらに、子どもがけがをしている時の保護者の気持ち(57名回答)では、「くじけずに早くよくなって頑張してほしい」とした者が33名と圧倒的に多く、「けがをしないよう気を引き締めてやってほしい」とした者が22名であった。「けがをする程までやらないでほしい(程々にしてほしい)」や「体操は危険なので、もうやめてほしい」はそれぞれ1名に過ぎなかった。

表9. 大会出場有無・成績別にみた、けがをしているときの練習状況

	休んだ	見学	柔軟・補強 運動だけ	痛くないの だけ	がまんして 普通に練習 した	その他	計
A ₁	2 (13.3)	—	4 (26.7)	8 (53.3)	1 (6.7)	—	15 (100)
A ₂	3 (27.3)	1 (9.1)	—	4 (36.4)	2 (18.2)	1 (9.1)	11 (100)
B	7 (16.3)	10 (23.3)	9 (20.9)	8 (18.6)	9 (20.9)	—	43 (100)
全体	12 (17.4)	11 (15.9)	13 (18.8)	20 (17.4)	12 (1.4)	1	69

A₁: 大会出場者上位25位以内
 A₂: 大会出場者上位25位以外
 B: 大会非出場者

(n=69) χ^2 test, P=0.04

子どもが体操を始めることの賛否については、保護者の 153名 (93.8%) が賛成としている。

図1は、現在行っている体操をいつまで継続する意志があるかについての回答を、大会出場の有無および成績別に示したものである。全体では、「大学・社会人になっても継続したい」とする者が圧倒的に多く、特に大会出場者のうち上位であった選手は80%を占め、継続の意志は強いといえる。しかし、小学校卒業まで、中学校卒業までとする者も約30%にみられた。大会出場の経験や成績と継続の意志には強い関係がみられた。(χ² test, P=0.0094)

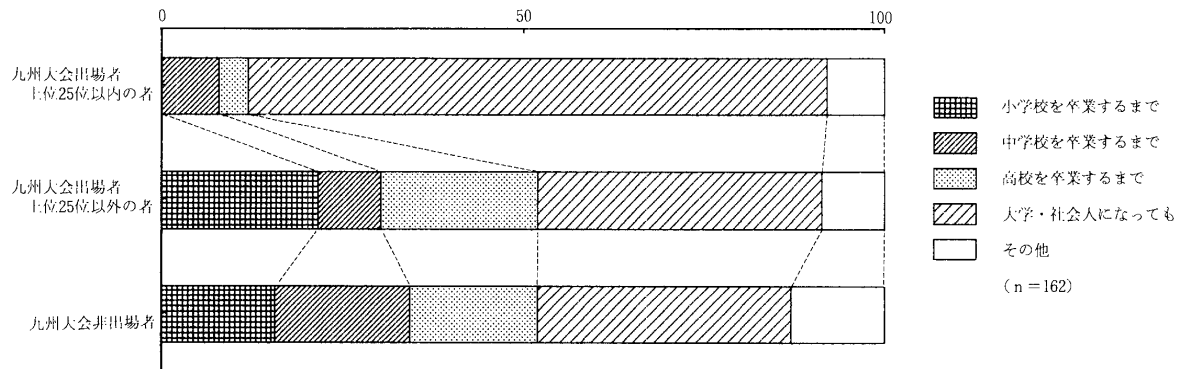


図1. クラブ員の体操競技継続の意志

図2は、保護者の考えた子どもにおける体操クラブの位置づけを示したものである。「小学校の間だけの楽しみ」、「たいくつしのぎ」の項は、それぞれ、3.9%、6.5%と非常に少ない。「これから先の学生生活において情熱を注ぎいれるもの」60名 (39.2%)、「今の生活を最も楽しくしているもの」55名 (35.9%) とし、さらに、「将来の職業も体操関係でと望むほど重要なもの」とした者も14.4%にみられた。

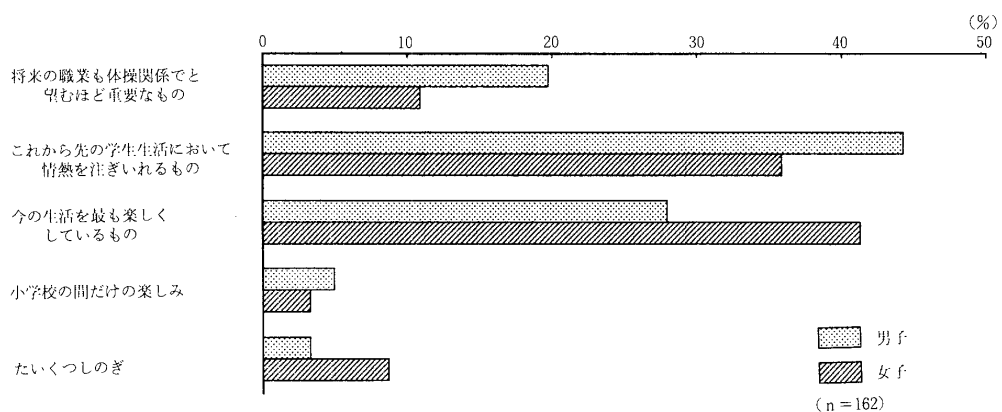


図2. 保護者の考えた子どもにおける体操クラブの位置

表10は、保護者の目からみた、体操を始めたことによる性格の変化を示したものである(複数回答)。「根気強くなった」57名 (35.2%) 「明るく活発になった」47名 (29.0%) が多く、次に「度胸

がよくなった」、「礼儀正しくなった」等の性格の変化を認めている。また、体操を始めたことによって、学校の成績が変化したかという質問では、悪くなったとした者は3名で少なく、逆に成績がよくなったとした者が21名に見られた。どちらともいえないとした者が128名(79.0%)で圧倒的に多かった。

表10. 保護者のみだ日常生活における性格の変化
(複数回答)
n = 146

イ. 明るくなった	47	(29.0)
ロ. 根気強くなった	57	(35.2)
ハ. 我が強くなった	16	(9.9)
ニ. 思いやりが出てきた	20	(16.7)
ホ. 礼儀正しくなった	27	(16.7)
ヘ. 外向的になった	13	(8.0)
ト. 度胸がよくなった	33	(20.4)
チ. 特にない	31	(19.1)
リ. その他	6	(3.7)

(%)

「体操をすることに、心配な点、不満な点はありますか」という質問に対し、自由記述式で回答を求めた。無回答以外は全て、「けがの心配」、「成長期の激しい運動が身体に及ぼす影響」があげられた。また、「専任コーチの不足」「施設の不備」など体操クラブに対する不満もみられた。その他「子どもが体操に追われて、家事の手伝い、寝をする暇がない」「中・高生になってからの、学業との両立」「将来の職業との関わり」などについての心配をあげているものも見られた。

IV 考 察

九州圏内の15クラブを対象に、162名のクラブ員とその保護者の調査紙を回収できた。

今回は、指導者を通じて調査を依頼し、回収率は問題としなかった。しかし、九州大会出場の可能性を持つクラブは、ほぼ網羅しているものと考えられる⁴⁾。

このことから、小学生の参加できる、体操以外の種目のスポーツクラブ(野球、サッカー、水泳等)と比較すると、体操クラブ数や競技を志す者は著しく少ないことが指摘できよう^{5,6,7,8,9)}。

クラブ員の経験年数は、2年以上、4年未満の者が最も多く、大会出場者もこの経験年数層に多い。このことは、ごく短期間の体操経験で九州大会に出場できる可能性は少なく、少なくとも2年以上の基礎技術の修得期間を経ることが、競技大会出場には必要であることを示している。

体操を始める動機については、積極的な動機を持つ者の他に、家人や友達の勧誘などの非積極的な動機を持つ者、さらには、はっきりとしない動機の者などもみられた。

この結果から、入部後の指導は、はっきりしない動機の者、あるいは、非積極的な動機を持つクラブ員に対しては、十分な教育的配慮のもとで、より積極的な動機づけの必要性があると考えられる。

練習状況については、「ほとんど休まず練習に参加している」と答えた者は、全体の65%であった。しかし、このことは、各クラブの活動状況が、週2～7日のバリエーションがあり、いちがい

には評価できない。週5日以上の実習は、技術的な向上は期待できるものの、身体的負担や保護者の負担が大きくなる可能性が高く、また、指導者もその負担は大きくなるもの¹⁰⁾と考えられる。

各クラブが週何日活動するかについては、選手の状態、保護者や指導者の負担などの面から、相互に話し合いながら、クラブの目的、目標に即した、日数や練習時間を決めていくことが良策だと結論づけられる。

練習が休みの時の自主練習実施状況の結果では、何らかの形で運動をしている者が多く、技術の向上や、精神面でも意欲的であるということが伺える。しかし、経験年数が2年～4年未満の者に、「何もしない」とした者が53.3%にみられ、意欲の面でも大きな差がある。練習日の多いクラブでは、普段の練習でも補なえる面もあるといえるが、適度の自主練習は、普段のコンディショニングのみならず、意欲持続のための方策として、重要な位置づけにあることとして、心掛けるべきであろう。

体操の技の修得には段階的、系統的練習を行うのが常であるが、新しい技への挑戦の際は、常に未知の空間動作への恐怖心が伴うものであり、この恐怖を克服することが課題となる。

今回の調査で、新しい技に対する態度については、大会成績が上位に位置した者は、「時々する」(60%)としており、このレベルの選手は、高得点につながるため演技構成上の難度充足のため、恐怖を克服し、新しい技に挑戦しているものと考えられた。

大会成績上位25位以外の者は、基本技の習熟段階であり、そのことが日常での練習課題でもあることから、「あまりしない」とした者も半分以上にみられた。

一方、大会非出場者においては、「よくする・時々する」を加えると48.6%が、新技に挑戦すると答えているが、これは、基礎・基本技も新技として考えているためだと考えられ、それぞれの技術段階で新技に対するとらえ方の違いが伺えた。

新しい技に挑戦する場面では、全体において「先生の補助があれば思い切ってする」とした者が圧倒的に多く、指導者の適切なアドバイスと信頼のおける補助とが大きな役割を果たしているといえよう。

子どもが体操を始めることに関して、ほとんどの保護者が賛成しているものの、大多数の者がけがの心配をしている。

このような意味からも、選手、指導者の関わりとともに、その保護者との三者間の相互理解、協力、信頼関係が、ジュニア体操クラブ運営上の重要なポイントであるといえよう。

さらに、けがをしている時の練習についても、そのけがの程度に応じ、専門家の指示に従いながら、目先のことにとらわれることなく、注意深く指導する必要がある。かつ、「痛くてスポーツができないというのは、小学生にとってはすでにかかなりの危険信号である¹¹⁾」という意見も、指導者、保護者とも理解しておくべきであろう。

体操競技を大学・社会人になっても継続したいとする者は、多数にみられ、特に大会上位の選手は高い割合を示した。しかし、大学・社会人になっても続けたいと希望しても、進学先の中学や高校に、受け皿としての体操部がないということも多い。例えば、現在、体操部を有する中学校は、熊本市内では、わずか1校だけである。所属するクラブで続ける場合にも、施設の問題や指導スタッフの人員に制限され、継続できる数にも限界があると考えられる。たとえ、そのクラブで続けたとしても、中学体育連盟の主催する試合への参加が認められないという事態も起っている。きしは、「スポーツをやりたいという欲求はあっても、それを子どもから奪ってしまう学校や社会情勢があることを、もう一度洗いなおす必要を感じる¹²⁾」としており、このことは、今後、学校側とスポーツクラブ側の話し合いに基づき、相互理解や連帯が必要であることを強調しているものといえ

よう。

保護者は、体操を始めたことによる心配事として、「けがの発生」や「学習との両立」をあげているが、成績との直接的な関係は認められないとしたものが、圧倒的に多かった。

日常での性格の変化については、「根気強くなった」、「明るく活発になった」など、スポーツ参加による直接効果を多くの者が指摘しており、「思いやりが出てきた」、「礼儀正しくなった」などスポーツ練習による教育的効果の面も強調する記載も多数にみられた。

このように、体操競技のジュニア選手の育成課題は、単にハイレベルの競技者を育てれば良いというのではなく、人間教育の側面から、選手一人一人の個性や将来といったものを視野においた育成が望まれていることが結論づけられる。

特に小学生を対象としたジュニア育成では技術面の研究はもとより、時には、母親や父親代りとなって、精神面でのフォローをすることが、指導者の課題として指摘された。

V 結 語

体操競技のジュニア育成の発展と技術向上の足がかりを作りたいと考え、九州圏内のジュニア体操クラブに所属するクラブ員とその保護者、および指導者を対象にアンケート調査を試みた。

第1報では、クラブ員および保護者の態度や意識の面から検討し、以下のような結果が得られた。

1. ジュニア体操クラブに所属するメンバーは、他の単一種目のスポーツクラブに比べ、著しく少なかった。
2. 体操を始める動機は「鉄棒・マット・とび箱が得意」、「オリンピック選手になりたい」など積極的な動機を持つ者が、それぞれ26.1%、25.5%にみられた。一方、非積極的ととれる者や、動機のはっきりしない者もみられ、これらの者に対しては、十分な教育的配慮のもとで、より積極的な動機づけが必要であると考えられた。
3. 新しい技に挑戦する時の態度や場面では、クラブ員の技術段階で「新しい技」に対するとらえ方の違いはあるものの、指導者の適切なアドバイスと、補助が大きな役割を果たすことが指摘された。そのため指導者は、平素から選手や保護者とも、そのかかわりの中で、相互理解や信頼関係も保つよう心掛けることが肝要である。
4. 体操競技を大学・社会人になっても続けたいとした者は、大会上位選手群では80%にみられたが、その他の者は33.6%であった。しかし、進級、進学等の関係から、今後、学校側とスポーツクラブ側の話し合いに基づく、相互理解や連帯が必要であると考えられた。

以上の結果および保護者から得られたアンケートの自由記載の項目から、小学生を対象としたジュニア選手の育成についての課題は、指導者およびクラブ員とその保護者が相互に協力しながら、将来を見越した基礎および基本技術の定着はもとより、精神面の成長を支援できる指導体勢を整えることが必要であると考えられた。

文 献

- 1) 遠藤幸雄：日本体操協会，体操協会機関紙，63，7，(1988)
- 2) 国際オリンピック委員会：ソウルオリンピック組織委員会オフィシャルブック，266～227，ベースボールマガジン社，(1988)
- 3) 九州体操協会：第4回九州小学生体操大会報告書，1-7，(1989)
- 4) 前掲書 3)
- 5) 財団法人日本体育協会：スポーツ少年団の活動実態と活動プログラムに関する研究(第1報)，1，1，1-201，(1988)
- 6) 丸山富雄：幼児のスポーツ参加と両親の影響(第1報)，仙台大学紀要，14，121-132，(1982)
- 7) 丸山富雄：幼児のスポーツ参加と両親の影響(第2報)，仙台大学紀要，16，19-26，(1984)
- 8) 永吉宏英，塚本真也：幼児・児童のスポーツ参加の社会的背景，体育社会学研究編，スポーツ参与の社会学，道和書院，101～121，(1977)
- 9) 南貞己，末永政治：鹿児島県におけるスポーツ少年団の保護者と指導者の実態調査，鹿児島大学紀要，22，25-31，(1989)
- 10) 松尾哲夫：社会体育領域におけるボランティア指導者のドロップアウトに関する研究(第1報)，138，日本体育学会第39回大会号(1988)
- 11) 松岡重雄：運動のできる子に注意，月刊トレーニングジャーナル，11，16-17，(1989)
- 12) きしさとる：生涯スポーツ時代と学校体育・スポーツ，体育科教育，10，37-39，(1989)